

随想

第172回

「健康寿命」という考え方が注目され、重要視されております。

健康は、常日ごろの注意と養生が重要であります。今回は、健康を害したときの心構えについて、皆さんとともに考えたいと存じます。

「大病院志向」といつて、ちよつと体調を崩しただけでも、最初から大きな病院へ行きがちであります。できれば、まず近くのお医者さんに診ていただき、必要に応じて、大きな病院を紹介していただくという心構えが必要ではないでしょうか。

そこで、「病診連携」ということについて考えてみました。

「参考までに、病院は病床二十床以上を有するものであり、病床二十床未満が

診療所であります。

病診連携とは、病院と診療所が密接な協力関係を築き、患者さん本位の、より良い医療を提供するシステムを作ることです。

私は生身の人間であり、いつ体調を崩すか分かりませんが、健康が心配なときもあります。

そうしたときに、信頼できる「かかりつけ医」を持つということが重要な意味を持つと存じます。



と存じます。

「かかりつけ医」とは、患者さんにとって身近なお医者さんのことであり、診療所の医師（開業医）であっても病院の医師であっても良いであります。

要は、日常の診療機会に、患者さんやその家族とお医者さんとの間に継続的な信頼関係があつて、医療について相談しやすいお医者さんを持つということがあります。

できれば家の近くのお医者さんで、家族の日常生活も知つておられるようなら安心できるでしょう。

なお、かかりつけ医の重要性に関連して、さらに申し上げますと、介護保険を利用する場合に、介護認定を受ける訳であります。その際必要な主治医意見書の作成について、身体状況を良く把握しておられる「かかりつけ医」であれば頼みやすくなると存じます。

病診連携ということ

地域医療を考える

土岐市長 塚本保夫

そして、いざというとき、病状によっては適切な専門医による診療や高度な検査ができる病院を紹介してもらい、紹介状を持って、より専門的な高度医療を受けることが大切です。

紹介状を持って病院へ来られる患者さんは、優先的に診察するというルール作りも必要であります。

ところで、本紙五月十五日

号で、市立総合病院に世界最先端のコンピュータ断層撮影装置「六十四列マルチスライスCT」導入の紹介をいたしました。これは全国二例目であり、患者さんの身体的負担が少なく、綿密で鮮明な画像で、的確な診断に大いに役立つものと期待いたしております。

土岐市では、より優れた医療機器の導入を進め、重装備化により、総合病院を名実共に

地域の中核病院として充実させたいと存じます。

それだけに、少し熱が出たとか風邪気味という場合には、まず近くの開業医で診察を受け、必要に応じて総合病院などを紹介していただき、しっかりと診断していただいた上で病状が安定すれば、また開業医に戻るといふことで、患者の皆さんの協力がいただければ、「長時間待つて、短い診察」などといった批判は、

かなり改善されるのであります。

少し難しく考えますと、地域の医療資源を最大限に生かすためには、病院と病院の「病診連携」と、病院と診療所の「病診連携」が十分機能することが大切であります。

身近で手軽な診療所をまず第一とし、総合病院などの二次、そして県病院や大学病院などの三次という具合に、医療体制が十分に機能分担することが求められます。

このように、一次から二次、三次という医療体制を十分認識する中で、市民の皆さんのご理解を得ながら、地域医療体制の一層の充実強化に邁進したいと存じます。

私たちの最高の宝物「健康」を維持するため、重要な医療のあり方をみんなで考えたいものであります。

注 紹介状の正式な名称は、「診療情報提供書」です。